

ともに学び「ゆらぎ合う」楽しさ

岡 多枝子

昨年度、本学に赴任して1年目に「総合演習Ⅰ（1年生）」を担当した。大学生活の基礎を学ぶこの科目では、研究課題の発見や文献検索、論文の書き方など学問のベースとなるプログラムが設定されている。ゼミ運営に際して、教室と図書館と地域とのトライアングルシステムを考えた。教室でのゼミの学びを図書館で書物や情報からの学びとして深めること、各自のテーマや課題を学外に持ち出してフィールドワークとして確かめること。それら三角システムの学びを通して、学生は様々な現実社会の矛盾や人々の暮らしに出会うことになり、教員も多くの学びを得たⁱ。今年度、サービ斯拉ーニングとしての「総合演習Ⅱ（教職課程履修者のゼミ）」を担当して、昨年度の学外活動を発展させる機会を得た。クラスは将来、学校教育現場で教員やスクールソーシャルワーカーとして働くことを希望している学生19名から成る。学生の活動先は、個人またはグループメンバーの関心領域にそって自分たちで開拓する形をとったが、年間に数回開かれたNPOを中心として展開している他4クラスとの合同の学びの場（サービ斯拉ーニング講座・キャサリン先生講演会・活動報告会等）も、学生の視野を広げ、多様な取り組みを学ぶ機会となった。

以下、活動から得た学びの一部を述べたい。クラス全体では、7月の福祉教育研究フォーラム（高校生・大学生の分科会での発表・司会・運営）や11月の日本福祉教育・ボランティア学習学会（学生実行委員）、12月のバスツアー（午前中セルフアゼーリアのクリスマス会、昼食アートスクウェアうんぷう、午後武豊工業地帯及び野間海岸環境調査）をはじめ多様な活動と学びを経験することができた。附属高校の生徒を主人公とした「ふくしの学びと仕事」のビデオ制作にも企画・撮影・母校の高校への配布とプレゼンテーションという形でかかわった。個人またはグループでの活動としては、「篠島での活動」「美浜地域調査」「介護福祉従事者への調査」「朝日ゼミとのジョイント学習」「養護学校訪問」「特別支援学級調査」「保育現場・公園調査」等々である。ひとつの活動先に受け入れ承諾をいただくまでに、十回以上の電話やmailによる打診・依頼を行うことも珍しくない。新型インフルエンザの影響で決まりかけていた活動先を断念せざるを得ないこともあった。学会やフォーラムでの発表資料作成が捗らなかったり、大勢の前での発表に緊張したりした。篠島チームは海岸清掃に1年と3年の岡ゼミを動員した。アンケート用紙を配布しに出かけた篠島で「私ら年寄りにはもう夢も希望もないから協力できない」と言われて立ちすくむこともあった。美浜地域調査に取り組んだ学生は住民から本学の学生たちのマナーの悪さを指摘されて冷や汗をかいだ。特別支援教育に取り組んだチームは、「しょうがい」に対する社会の偏見と、教育システムの壁につきあたった。それら、現実社会が学生につきつける様々な矛盾や不条理に、学生はゆらぎ、葛藤し、悩み、模索した。教員もまた、ともにゆらいだⁱⁱ。秋にアメリカからキャサリン先生が来日、「社会変革」に関する目のさめるような講演をされたことで、学生の活動や学びに「意味づけ」がなされた。何のために活動するのか、何のために学ぶのか。そして、12月12日、報告会の発表資料のタイトルは「私たちの社会変革—サービ斯拉ーニングからソーシャルアクションへ—」となっていた。学生の成長と変化は止まるところを知らず、発展し続けるのである。本プログラムは、日本福祉大学の長年にわたる社会福祉実習教育で培った理念と技術がベースとなり、地域の多方面の機関や個人の方々の多大なる協力のもとに実施された。学生の活動を受け入れていただき、多くの学びの場を提供して下さった皆様に心から感謝申し上げたい。学事課の家田保久課長にもゼミTTとして、サービ斯拉ーニングの地域資源へのアドバイスや情報提供、学生の成長に対する客観的評価など有益な協力をいただいた。感謝申し上げたい。

ⁱ 詳細は、「2008年度『総合演習Ⅰ』報告集—地域に学び仲間と創る—日本福祉大学社会福祉学部社会福祉学科1年岡多枝子クラス」を参照されたい（本学図書館に所蔵）。

ⁱⁱ 尾崎は、ゆらぎを混乱や危機を意味すると同時に多面的・複層的な視野、システムや人の変化・成長を導く契機と定義している（尾崎新1999「『ゆらぎ』ことのできるカー—ゆらぎと社会福祉実践」誠信書房）。サービ斯拉ーニングもその実践現場であろう。